

第一話 優しい幼馴染

一月の夜。

吐く息が白く染まる。

住宅街の街灯だけがぼつぼつと道を照らし、辺りはもうすっかり静まり返っていた。
午後十時四十分。

スマホを握り締めたまま、小さくため息をつく。

送信したメッセージは、たった一行。

『お腹すいた。ファミレス行かない？』

こんな時間に誘うなんて非常識だろうか。

そうは思っても、さっきから腹の虫が鳴り止まないし、家にいるのも嫌だった。

少し前まで、母と大喧嘩していた。

原因は、四月から始まる社会人生活。

都内の会社へ就職が決まり、自宅から会社まで通えば片道二時間。

当然、一人暮らしをするつもりでいたので、三月には家を出る旨を伝えたら、この喧嘩は突如勃発した。
『女の子なんだから危ないでしょ』

その一点張り。

私はもう二十二歳。

世の中には、自分より若くして一人暮らしをする女の子もいるのに。

大体、二十二歳に「女の子」なんて表現が本当に適切なのか。もう立派に女性の領域だ。

大学も卒業するのだから、子どもじゃあるまいし。

そう何度話しても、平行線。

勢いで部屋を飛び出してきたものの、夕飯も食べていなかった。

「さっむー……っ」

ジャンパーを羽織ったとはいえ、外は氷点下近い。

スマホ見てないのかな。

そう思って確認してみると、既読はついている。

もう直接家に行ってやろうか。

なんて考えだした、その時だった。

『行く。五分』

「……早」

思わず笑う。

確認してから十秒も経っていない。

こんなに返信が早いのは、スマホをいじっていたってことだろう。

ほどなくして。

「紗良」

聞き慣れたテノール。

振り向くと、黒いパーカーにダウンを羽織った海が、こちらへ軽く手を上げていた。

朝倉海《アサクラカイ》。

家が隣で、同じ年に生まれて、物心がついた時にはもう一緒にいた幼馴染だ。

柔らかそうな明るい髪に、ぱっちりとした丸い目。長い睫毛に縁取られた瞳は、男の子にしてはずいぶんと愛らしい。

笑うと目尻が下がって、どこことなく犬っぽく見える。整った顔立ちも相まって、昔から女の子にはよくモテた。

もつとも、私には関係のない話だ。

海が私を女の子として見ていないことくらい、ずっと前から知っている。

だから私にとっても、海は海だ。

幼馴染で、家族のようなもの。

それ以上でも、それ以下でもない。

寝癖なんてひとつもないところを見ると、寝ていたわけではなさそうだ。

きつと、さっきまでゲームでもしていたのだろう。

「寒」

そう言いながらポケットへ手を突っ込む。

「ごめんね、急に」

「いいよ」

それだけ言って歩き出す。

「なんで急に呼び出したの？」
なんて聞かない。

昔からそうだった。

海は呼べば来てくれる。

理由はあとで聞けばいい、くらいの感覚なのだ。

べらぼうにお人好しというか、世話焼きというか。

隣の家で育った二十二年間、それを当たり前に頼って生きてきた。

住宅街を抜け、大通り沿いのファミレスへ向かう。

夜道を歩きながら、海が何気なく口を開いた。

「夕飯どしたの」

「ん？」

「今日おばさんいない日？」

「違う」

私は頬を膨らませる。

「喧嘩した」

「あー」

海はそれだけで納得したように頷いた。

「また？」

「また！」

問い返された途端、さっきまでどうにか押さえていた不満が、再びむくむくと膨らみ始める。

「聞いてよ！」

待ってましたと言わんばかりに、私は歩幅を速めた。

海も何も言わず、その隣へ追いついてくる。

「一人暮らし反対なんだって！」

「うん」

「『女の子だから危ない』って！」

「うん」

吐き出した息が、苛立ちごと白く染まって夜の中へ消えていく。

「いや、気持ちは分かるよ？」

一度そう断ってから、すぐに声を張り上げた。

「でもさ！」

勢いよく海を振り仰ぐ。

「私、内定もらってるの東京の会社！ 家から通ったら片道二時間だよ！？」

「死ぬって！」

「……うん」

「嫌なら会社変えろとか言うんだよ！？」

「もう内定決まってるの！」

「今、一月！」

「四月から社会人！」

「今さら変えられるわけじゃないじゃん！」

一気に吐き出したせいで、息が切れた。

その間、海は口を挟まない。

ただ隣を歩きながら、小さく相槌を打つだけ。

「うん。まあ、それは無理」

私の歩調が速くなれば同じだけ速め、立ち止まりそうになれば、何も急かさず隣で足を緩める。

「でしょ!？」

「うん、まあ、なんでこんな時期にそんな話で揉めたんだとは思わなくはないけど」

呆れを含んだ一言は、聞かなかったことにした。

それでも、ようやく味方が一人見つかった気がして、少しだけ胸が軽くなる。

「そりゃ私だって、一人暮らしが危ないのは分かってるよ？」

物騒なニュースも聞かし、友達から怖い話を聞いたことだってある。

「でも、実家を動かせるわけじゃないじゃん」

ほかに道なんてないのだ。

「毎日四時間通勤とか無理だよ……」

定時で帰れたとしても、会社と往復するだけで一日の半分以上が消える。それが毎日続くなんて、考えただけで気が遠くなった。

「私に死ねって言うのか……」

「そこまでは言っていないでしょ」

海の冷静な突っ込みが返ってくる。

けれど、それきり会話は途切れた。

隣を歩く海は少しだけ視線を落とし、何かを考えるように黙り込んでいる。聞こえるのは、アスファルトを踏む二人分の足音だけ。

やがて、大通りの向こうにファミレスの明るい看板が見えてきた。

その頃になって、海がぼつりと言った。

「じゃあ、まあ、仕方ないか」

「ん？」

「紗良、一緒に住む？」

私は足を止めた。

「……え？」

一歩先で海も立ち止まる。

その表情は、驚くほどいつも通りだった。

「俺も四月から都内だから、三月には引っ越す予定」

「紗良も都内で家探してる」

「家賃は折半したら条件いいところ探しやすいな」

「紗良は通勤時間も短くできる」

「ひとりじゃないからおばさんも安心」

「一石四鳥。これじゃね？」

「いや」

思わず吹き出した。

「数え方おかしいから！」

「ああ、紗良がホームシックになるのも防げるから五鳥？」

「いや、ホームシックならんわい！！」

「つつこみながら、海の胸元をどつく。」

「違くて！ 海」

「ん？」

「男女だよ？」

「うん」

「そりゃ私たちは、お互い物心つく前からオムツ貸し合ったり、おもちゃ取り合ったり、いつでも一緒にいた幼馴染だけど」

「うん」

「男と女なんだよ？　そんなのはさあ」
絶対おかしい。

そう告げようとするのに、目の前の海は本当に不思議そうに首を傾げている。
「でも困ってるんでしょ？」

「……」

「だったら、おばさんも納得する方法を提示しなきゃ」
その一言に、迷いはなかった。
思わず苦笑する。

「海ってさ」

「ん？」

「昔から困ってる人放つとけないよね」

小学生の頃も、転んで泣いたら絆創膏を持ってきてくれた。

中学生では、忘れ物をした私に教科書を貸してくれた。

大学生になってからも、終電を逃せば迎えに来てくれる。

別にどれも、特別なことじゃない。

海にとっては、困っている人を助けるのが普通なのだ。

「なーんでそんな優しいかなあ」

「……………」

海は明後日の方を見ながら、少しだけ笑った。

否定もしない。

肯定もしない。

ただ静かに、私の少し前をまた歩き出す。

「まあ、ファミレス着いたら考えよ」

「うん！」

私は笑って、その隣へ並んだ。

突拍子もない提案ではあったけれど、おかげで、さっきまで胸の中で暴れていた苛立ちはいつの間にか随分と小さくなっていった。

ファミレスの自動ドアが開くと、暖かな空気が冷え切った頬を撫でた。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「はい」

店員に案内され、窓際の席へ向かう。

向かい合って腰を下ろした途端、大きく息を吐いた。

「あったかあ……」

「外で待ってるから」

「だって家いたくなかったんだもん」

「せめて連絡してから出ればいいじゃん」

「だって海ならすぐ来ると思ったし」

「俺が？」

「うん」

あっさり答えると、海が一瞬だけ黙った。

「……来なかったらどうすんの」

「家まで迎えに行く」

「それはもう誘ってないんだよ。強制連行なんだよ」

呆れたように言う海の口元は、けれど、緩く弧を描いていた。

そのままテーブルの端に置かれたタブレットを、こちらへ向ける。

「何食べる？」

促されるまま、タブレットを覗き込んだ。

画面に並ぶ料理をいくつか流し見して、目当てのものを見つけると迷わず指を止める。

「ハンバーグ！」

「夜中に？」

海が呆れたように眉を上げた。

「夕飯食べてないって言ったじゃん」

「聞いてない」

「言っていないもん」

「知らんがな」

すぐさま返され、気にせずハンバーグを注文に追加する。

その隣から海が指を伸ばし、ドリンクバーを二つ追加した。

相変わらず勝手に決める。

けれど、私が食事中に飲み物を二杯以上飲むことも、食後には温かい紅茶を飲みたがることも、海は知っている。

だから、そもそも確認する必要がないのだ。

「海は？」

タブレットを渡すと、海は大して迷いもせずサイドメニューを開いた。

「ポテト」

「それだけ？」

「俺は夕飯食べたし」

海の指が、フライドポテトの写真を軽く叩く。

「じゃあハンバーグちよつとあげる」

「いらない」

画面から目も上げずに断られ、唇を尖らせた。

「なんで？」

「どうせ最後に足りなくなるじゃん」

「ならないよ」

「毎回なる」

海は注文内容を確認しながら、取り合う様子もなく言う。

「今日こそは、ならないかもしれないじゃん」

「いや、どっちなん」

注文を済ませると、二人でドリンクバーへ向かった。

私がグラスにメロンソーダを注いでいる横で、海はアイスコーヒーを選んでいた。

真冬だというのに、二人揃って冷たい飲み物だ。

席に戻り、ストローで一口吸ったところで、ようやく本題を思い出す。

舌が痺れそうなほど強烈な甘みが、口いっぱいに広がった。

普段なら甘すぎると思うのに、どうしてかファミレスに來ると、この殺人的な甘さが恋しくなる。きつと政府の陰謀に違いない。

「それで」

「うん」

海はアイスコーヒーをストローで混ぜながら、続きを促した。

「さっきの、本気？」

「何が？」

「一緒に住むってやつ」

「本気じゃなかったら言わない」

氷が、からんと音を立てる。

あまりにあっさり返されるものだから、こちらが気にしすぎているような気がしてくる。

「ルームシェア？」

「うん」

「なんか、同棲みたい……」

口にしてから、妙に気恥ずかしくなった。

けれど海は動揺する様子もなく、ストローを咥えたまま小さく首を傾げる。

「ん、まあ、似たようなもんではあるんじゃない？」

「え、でも同棲って、付き合ってる男女のものではないの？」

「同じ家に住んで、毎日一緒にご飯食べて、一緒に買い物とか行くんでしょ？」

海は本当になんでもないことのように言った。

「じゃあ、別に同棲でもルームシェアでも変わらないじゃん」

改めて考えてみる。

同じ家に帰って、ご飯を食べて。休みが合えば、一緒に買い物へ行く。

そう聞くとすごいことのような気もするけれど、相手は海だ。

「んー、今とさほど変わらない？」

「まあ、今の俺ら、一応屋根が分かれてるだけのようなんだしね」

言われてみれば、確かにそうかもしれない。

お互いの家を行き来して、どちらかの家で夕飯を食べることも珍しくない。買い物に付き合ってもらったってある。

それが一つの家になるだけだと思えば、大した変化ではないような気がしてきた。
なるほど、と一人で納得する。

顔を上げると、海はストローを咥えたまま、じっとこちらを見ていた。

「部屋は別だと嬉しいな」

「そりゃそうでしょ。二LDK探そう」

こちらが問題を挙げるたび、海は当然のように解決していく。

「あ、待って。洗濯とかは？」

「自分の基本、自分ですることにしよ。一緒に洗うの嫌でしょ」

「嫌ではないけど」

「……」

海がわずかに眉を寄せた。

そこでもうやく、一緒に洗うということは、海に自分の下着を見られる可能性があるのだと気づく。

「あ。でも、何カップかはトップシークレットだから、やっぱり無理」

「……」

海は何度か瞬きをした。

それから何かを言おうとして口を開きかけ——結局、何も言わずに閉じる。
最後には、ものすごく残念なものを見るような目で私を見た。

「何、その顔」

「何のために洗濯すると思っただ。あほか」

「でも、タグとか見たら分かるじゃん！」

「見ねえよ」

「うっかり見ちゃうかもしれないでしょ」

「はいはい。見ませんよ」

海はすっかり面倒くさそうな声で答えると、ストローで水をかき回した。
からからと鳴る音が、呆れの深さを表しているようだった。

「あっ！ 待って！ もう一個！」

「次は何」

今度こそ何を言い出すのかと、海が半目になる。

「彼女連れ込むのはなし！」

そう言った途端、海の手が止まった。

「……いないから平気」

「ほんとかー？ できても連れてこないでよねー？」

「はあ。別に作る気ないし」

海は面倒くさそうに前髪を掻き上げた。

「え？　なんで？」

思いがけない言葉に、目を丸くした。

「……さあね」

「海、まさか」

身を乗り出した瞬間、海は眉間に皺を寄せて、露骨に嫌そうな顔をした。

「違う」

「なんで！」

まだ何も言っていないのに、先回りして否定された。

「絶対、『彼氏なの？』とか言う気だったろ」

「え！　なんで分かったの！？」

「はあ。紗良の言いそうなことなんか分かるよ」

海はアイスコーヒーを一口飲んで、窓の外へ視線を逸らした。

「それより、紗良こそ分かってるよね」

「私？　何が」

「彼氏、家には呼ばないでよね」

「いないから大丈夫」

「今後できた場合も」

「分かった！ 家には呼ばない」

「俺がいない時とかに呼ぶなよ」

「呼ばないよ！ 海が帰ってきたら修羅場じゃん！」

面白くて笑うのに、海はぴくりとも笑わなかった。

……やばい、すべった。

「つーか、彼氏いたら、さすがに一緒には住めないから」

「そっか、確かに……」

神妙な表情で言われて、改めて状況を考える。

もし本当に彼氏がいたら、幼馴染とはいえ、ほかの男と一緒に暮らすなんて顔向けできない。海にだって迷惑がかかる。

もちろん、悲しきかな、今のところはイマジナリー彼氏なわけだけだ。

「じゃあ私、彼氏作れないってこと？」

「欲しいの？」

「まあ、作れなくはないんじゃないの？」

海の答えはあまりにも堂々としている。

「え？ どういうこと？」

「さあ？」

海はしばらくこちらを見つめていた。

少し怒っているような、それでいて、なぜか楽しそうな顔。
やがて、いたずらっぽく舌を出す。

「たまには自分で考えてみたら？」

意味が分からない。

考えながらメロンソーダへ手を伸ばし、ストローを咥える。

勢いよく吸い込んだ瞬間、舌いっぱいに強烈な苦味が広がった。

「ん、っ……！」

思わずむせ込む。

見れば、手にしていたのはメロンソーダではなく、海のアイスコーヒーだった。

海が堪えきれないように吹き出す。

「バーカ」

私の手からアイスコーヒーを取り戻すと、代わりにメロンソーダを押しつけてきた。

いたずらっぽく細められた目も、口元に浮かんだ笑みも、私がよく知る幼馴染のものだった。

それなのに、その時の海は、ほんの少しだけ知らない男の子に見えた。

